

懸賞論文 佳作

ローソク足の成立過程を探る

古城 鶴也

要 旨

ローソク足は、始値、高値、安値、終値の4つの特徴的な価格をビジュアルに記録し、その推移を明確に表示するチャートとして世界で広く利用されている。しかし、その成立経緯については、日本における罫線の発展史を解説した「日本罫線史(*12)」にも明らかにされていない。そこで、国立国会図書館「近代デジタルライブラリー(*10)」で公開されている書物を検索し、ローソク足に関連する記述の有無および内容を調査した。その結果、早坂豊蔵がローソク足の成立に大きく関与したと考えられ、ローソク足は本間宗久が考案した酒田足に由来するという俗説は誤りであること、ローソク足と酒田足が混同された経緯などが判明したので報告する。

緒 言

ローソク足は、観測周期の中で始値、高値、安値、終値の4つの特徴的な価格をビジュアルに記録し、その推移を明確に表示するチャートとして世界で広く利用されている。ロイターやブルームバーグなど海外の金融情報端末でもキャンドル・チャートとして表示される。欧米のバーチャートも4本値を表示することができるが、1本の足形の中で上昇したのか下落したのか、識別はローソク足ほど容易ではない。海外の記録方法において、上昇と下降を明確

●プロフィール

古城 鶴也

1977年東京農工大学農学部卒。1987年日産証券(株)調査部入社。投資情報部長の後、第一投資顧問(株) 出向を経て経営企画部部長、有価証券部長、ディーリング室長、業務管理部部長を歴任。2013年ジェイアイ傷害火災(株)財務部、2015年日本テクニカルアナリスト協会事務局業務部長。2000年から同協会理事、独自開発のKチャートでMFTAを取得。2011年ストックボイスにレギュラー出演。金融財政事情研究会「テクニカルアナリスト短期養成スクール」、早稲田大学、南山大学、明治大学のオープンカレッジ等の講師を務める。共著に日本テクニカル分析大全他。



に区別して描くのはポイント・アンド・フィギュアくらいしかないが、日本では棒足などの規則時系列罫線だけでなく、新値足、電光足、カギ足など不規則時系列罫線でも陰陽を区別して記録する。

現在、陰陽足といえばローソク足を指すが、最初に陰陽足を詳述した「期米相場罫線秘法(*8)」を見ると、古くは棒足を指していたことが分かる。騰落を区別して描く足形はすべて陰陽足と呼ばれたが、最も古い相場書の1つ「八木虎の巻(*20)」では「人の気分陽に進み登りつめたる時は陰来て陰に赴き下る物也又陰に下りつめる時は陽来て上る物なり此道理も月日の違時節のちがひはあるといへども凡此陰陽の理にはづる事なし」と述べ、日本では古くから陰陽思想を通じて相場を観察していたことがうかがえる。

ローソク足の成立について、巷間、本間宗久が考案したという話が流布されているが、その根拠を明示している書物は見たことがない。「日本罫線史(*12)」は、日本における罫線の発達史を解説した数少ない書物だが、ローソク足を誰が考案したか、あるいはその成立過程について明記していない。同書は江戸期まで遡って書物を調べて書かれているが、ローソク足の出自について詳述がないのは極めて不自然である。このことは、同書の執筆陣が調べ

1 た限りでは、ローソク足の由来に関する書物を見つ
2 けることができなかったことを示唆している。

3 林輝太郎の「定本酒田罫線法 (*18)」は、本間
4 宗久が創案したとされる「酒田罫線」について詳細
5 な解説をしたものだが、冒頭で酒田罫線と本間宗久
6 は無関係としているものの、ローソク足の由来につ
7 いての記述はない。

8 ところで、日本で最も蔵書が多いのは国立国会図
9 書館と思われるが、同館では著作権が切れていると
10 判断した書物を「近代デジタルライブラリー (*10)」
11 としてインターネットで公開している。そこで、同
12 ライブラリーを検索して公開書籍を調べ、ローソク
13 足の成立について再調査を行った。その結果、ロー
14 ソク足を考案した人物を特定する書物を発見するこ
15 とはできなかったが、ローソク足の原形を最初に紹
16 介した書物が明らかとなり、早坂豊蔵が成立に大き
17 く関与していたと考えられることが判明した。また、
18 本間宗久はローソク足以外のチャートを使っていた
19 ことや、酒田足がローソク足ではなかったことを示
20 す記述も確認したので報告する。

21
22 本稿では、一部に原典を引用したが、引用に当たっ
23 て旧漢字は現行漢字に改め、変体仮名は現在の仮名
24 に置き換えた。これらの書き換えは WORD 文書作
25 成上の都合であって、原典の趣旨を変更する意図は
26 ないことを記しておく。

27 方法

28
29 国立国会図書館「近代デジタルライブラリー
30 (*10)」のウェブサイトを利用して、同ライブラ
31 リーを「罫線」、「相場」、「足取」、「期米」、「陰陽
32 足」、「本間宗久」などのキーワードで検索した。検
33 索された書物は、目次を手掛かりに内容を確認し、
34 チャートに関する記述があるものを選抜した。相場
35 関連の書物であっても取引手順や取引所の仕組みあ
36 るいはファンダメンタルズ分析について解説したも
37 の、もしくは相場価格表の類いなど、テクニカル
38 分析の発展史の調査に参考とならないものは除い
39 た。その結果、最古の「第二回国内勸業博覧会出品
40 輸出入諸統計及物価表」(1881、表 1 の No.1、以
41 下同様)から「株式便覧 第 38 次 (昭和 16 年)」

(1940、No.145) に至る 145 組計 162 冊の書物
1 を得た (表 1)。

2
3 次に、選抜した書物を出版年の古い順に並べ、記
4 載された内容を相互に比較して関連性、類似性、特
5 異性について検討した。例えば、記載されている内
6 容が類似していれば、年代の新しい書物はより古い
7 書物を参考にして書かれた可能性が示唆される。ま
8 た、複数の書物に類似の記述があれば、それらの内
9 容は出版当時に広く認知されていたことが推測され
10 る。一方、唯一無二の記述であれば、執筆者独自の
11 意見もしくは手法である可能性が高い。書物によっ
12 ては「古来より行われている」「市中で行われている」
13 などの記載があっても、他の書物に相応の記載が見
14 当たらなければ、執筆者の意見である可能性がある。

15 その中で発見されたローソク足の図もしくはロー
16 ソク足の描き方、あるいはローソク足を指す言葉が
17 記載されている書物を起点として情報を整理し、再
18 配置することでローソク足の成立過程を探った。

19 結果と考察

20
21
22 ローソク足の図を最初に掲載したのは無髯老人こ
23 と安田与四郎である。

24 「株式罫線講習録」(1924、No.111、*19) の「第
25 五章 陰陽引日足」で、「総ての罫線の内日足が
26 最も完全なものであることは、前にも記した如くで
27 ある。日足にも色々引き方があるが、陰陽引と称す
28 るものが最も完全だと信ずる。」と書いたが、ロー
29 ソク足に類する名や描き方の由来についての言及は
30 ない。陰陽引は「いんようびき」と読む。

31 描き方の説明では陽線は朱で描くとしながらも、
32 図を見ると陰線は黒で塗りつぶし、陽線は黒枠白抜
33 きにして、高値、安値まで細線を引いた (図 1)。

34 陽線を朱ではなく白抜きで表すという工夫によっ
35 てモノクロ印刷が可能となり、現在のローソク足が
36 完成したことになる。

37 安田与四郎は、「資本論」(1907)、「経済動態の
38 研究」(1925)などを著した経済学者だが、「空前
39 の大相場」(1918 年出版、No.74)、「株式相場の観方」
40 (1923、No.109) など投資の手引書も出している。
41 安田はその頃ダイヤモンド社に席を置いていたよう
42 で (ダイヤモンド社石山記念ホール HP・石山賢吉

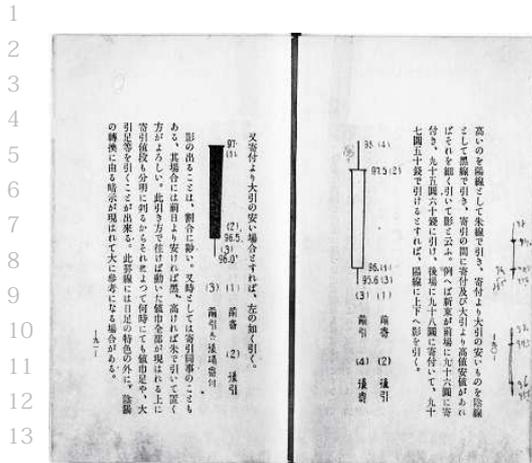


図1. 安田与四郎「株式野線講習録」(1924, No.111)



図2. 井上三味「足取の原理」(1920, No.94)

物語、*13)、「株式野線講習録」も同社から出版されている。そこで、ローソク足を考案したのはダイヤモンド社だとされることもある。しかし、ローソク足に関する記述は、もっと遡ることができる。

ローソク足に類する言葉を用いたのは、井上広吉が井上三味の名で出した「足取の原理」(1920、No.94、*4) だけであった。「古来棒足を引くに、要軸の部分のみを太くなし、潜端は細き線にて書きたれば、その形状あたかも蠟燭に似たるを以て、之を蠟燭引と唱えた」(図2) とある。

蠟燭引は「ろうそくびき」と読む。図はないが、説明を読む限り現行のローソク足と同じであり、1920年にはローソク足は成立していたと考えられる。しかし、「蠟燭引」に類する語を紹介している書物は他に見当たらないことから、「蠟燭引」という名は井上広吉がつけたものかもしれない。

もっとも、井上は「併かし近来は烏口もあることとて、棒足を引くには寧ろ前述の如く、要軸の部分赤なり黒なりにて塗り、之に添えて潜端を二本引とする方が、大に見良いのである、尤も之を略して引くには、高値安値の間を全部赤なり黒なりに一線を引き、之に唯だ寄引の印を加へて済ますのである。」と述べ、蠟燭引より棒足を推奨している。さらに、1925年に出された改訂版「足取之原理」(No.117、*5) では蠟燭引に関する記述そのものを削除してい

る。このことから、井上広吉はローソク足に関する最も古い記録を残したものの、その考案者とは考えにくく、普及にも貢献しなかったと考えられる。

井上広吉の記述に従って、1920年以前の「要軸を太く書く棒足」の記述を探すと、以下が見つかる。古い順に早坂二菊(豊蔵)の「相場野線術講義」(1904、No.25、*15)、井上陽三郎の「定期相場高低野線推理法」(1910、No.34、*6)、斎藤整軒(八三郎)の「期米相場野線学・第三版」(1912、No.40、*11)、岩谷楽泉の「期米観測楽泉秘録」(1913、No.39、*7)、早坂豊蔵の「最新期米之研究」(1913、No.43、*16)、同じく早坂豊蔵の「相場大野線学」(1914、No.46、*17) である。

「相場野線術講義」(1904、No.25、*15) の説明には「第五は垂直線法より変化したる者で其描法の錨の形に似て居る所からして假に錨法と名付けました其画法は寄付と大引の間を垂直線の太き者を以て書き寄付或は大引より最高直乃至最低直の線を細く出して描画するのである」とある(図3)。井上広吉の「棒足から派生した」という記述と一致する上、執筆者が自分で名付けたと書いている。この「錨形法」は「現今相場社会に普通に行はれている野線の描画法」の1つとされているが、執筆者が考案したのもかもしれない。

「相場野線術講義」の著者は本間宗久、葛岡五十香・

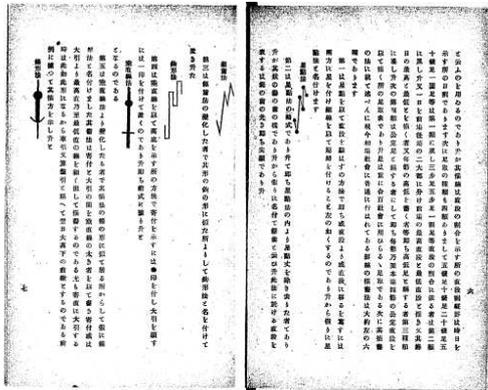


図3. 早坂豊蔵「相場野線術講義」(1904, No.25)

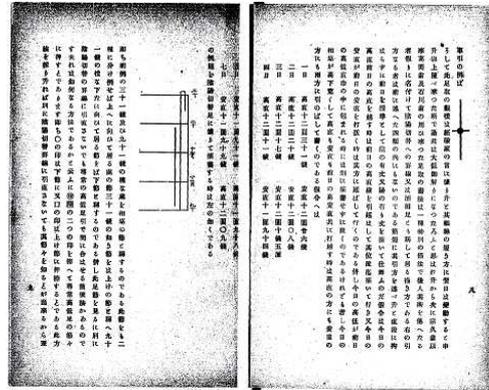


図4. 早坂豊蔵「相場野線術講義」(1904, No.25)

15 石川善兵衛増補、早坂二菊（豊蔵）講義、福田正風
 16 執筆となっている。しかし、明治時代に本間宗久は
 17 生存していないから、原案は本間宗久に由来してい
 18 たとしても、同書の著者が本間宗久であるはずはな
 19 い。葛岡五十香、石川善兵衛、福田正風も他に書物
 20 を書いた形跡はなく、唯一、早坂豊蔵は「荘内本間
 21 宗久翁遺書」（1894）、「本間家秘蔵宝書」（1902）、
 22 「宗久翁相場全集」（1910）など、明治期に出版
 23 された本間宗久に関する書物の大半を書いている。
 24 従って、早坂二菊（豊蔵）講義とあるように、本書
 25 の事実上の執筆者は早坂豊蔵と考えられる。

26 ところで「相場野線術講義」は酒田足に関する記
 27 述があることでも注目される。「次に宗久翁以来葛
 28 岡翁及石川翁の用ひ来った足取の画法は一種特別の
 29 描法で後人其術を伝へたる者假りに名付けて陰陽切
 30 替への野線又は酒田足とも称して居る描き方である
 31 (。右の引き方なる者は前に述べた四類の内にもな
 32 いのである(。簡単に其引方を延べ升と直段に拘
 33 はらずに前日を標準として陰の有丈又陽の有丈を描
 34 いて仕舞ふのだ(。假令は今日の高直前日の高直
 35 を越す時は前日の高直線を引延はして其位置迄描
 36 て行き又今日の安直が前日の安直を打抜く時は其方
 37 に延ばして行くのである(。併し今日の高直が前
 38 日の高低直中の中に包まれる時には別に描画せずに
 39 置くのであるけれども若し今日の相場が高下荒くし
 40 て高直も安直も前日の高安直共に打越す時は高直の
 41 方にも安直の方にも両方に引きのぼして書くのであ
 42 る(。）」という記述がある(図4)。

15 (。は論者が追加したもので「直」は「値」と思
 16 われるが、内容を要約すれば、本間宗久以来、葛岡
 17 五十香、石川善兵衛が用いていたのは一般に知られ
 18 ている足形とは異なり、陰陽切替足または酒田足と
 19 という描き方であると述べ、その描き方を説明してい
 20 る。15ページにある図を合わせ見ると、酒田足と
 21 は新値を更新するたびに延長してゆくカギ足のような
 22 ものであることが分かる。これは、不規則時系列
 23 野線である。つまり、この記述が正しいとすれば、
 24 本間宗久はローソク足を使っていなかったし、不規則
 25 時系列野線である酒田足から規則時系列野線である
 26 ローソク足が生まれたとは考えにくい。従って、
 27 ローソク足と本間宗久あるいは酒田足とは無縁と考
 28 えられる。

30 井上陽三郎の「定期相場高低野線推理法」(1910、
 31 No.34、*6)は、早坂の錨形法を改良したものと見
 32 ることができる。寄付を起点として大引までを太い
 33 矢印で描き、寄引から最高値あるいは最安値までの
 34 影に相当する部分を点線で書くのである(図5)。

35 ローソク足とほぼ同じ機能を持っており、矢印の
 36 方向によって騰落を示すのは理解しやすい。ただ、
 37 井上陽三郎は、この描画方法に特段の名前をつけて
 38 いない。

40 斎藤整軒（八三郎）の「期米相場野線学・第三版」
 41 (1912、No.40、*11)には「第六錨形法は俗に錨
 42 足と称す、其描方は図に示すか如く寄付と大引を表

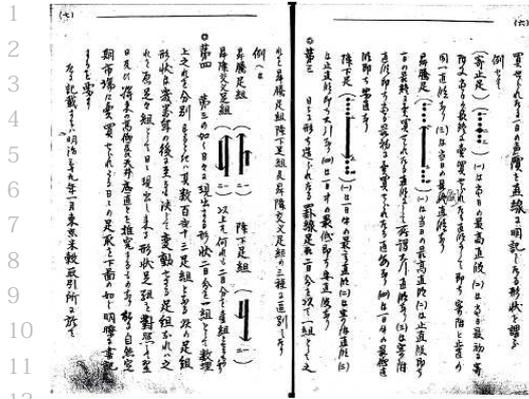


図5. 井上陽三郎「定期相場高低罫線推理法」(1910, No.34)

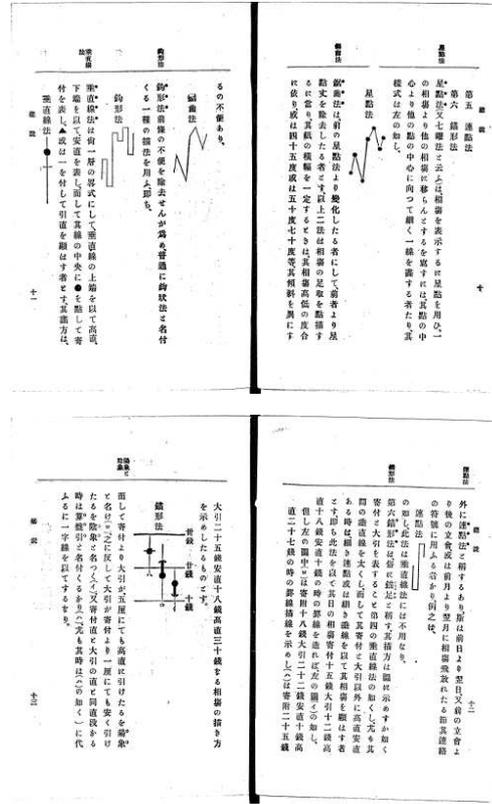


図6. 斎藤整軒「期米相場罫線学第三版」(1912, No.40)

すこと第四の垂直線法の如くし、尤も其間の垂直線を太くし、而して其寄付と大引以外に高直安直ある時は、細き連点或は細き垂線を以て其相場を顕はす者とす」とある。同書の図柄は細いが「相場罫線術講義」と同じで、影の部分は井上陽三郎の描き方も含めている。

ところで、「期米相場罫線学・第三版」の記述(図6)は「相場罫線術講義」(図3)と分類の仕方も説明の順番も良く似ている。そこで調べると「期米相場罫線学」の初版(1903)では、著者が斎藤と早坂豊蔵の共著になっている。斎藤には他の著作の記録がない一方、早坂には罫線や相場関連の著作が複数ある。このことから、「期米相場罫線学」は早坂が斎藤の名を借りて出したのではないかという疑念がわく。「期米相場罫線学」も「相場罫線術講義」も実質的な著者が早坂だとすれば、記述が類似していても不思議はない。早坂が関与していない同年代の書で「錨形法」の記録は見当たらないことから、「錨形法」は早坂が考案した可能性が高い。「期米相場罫線学」の初版が確認できないので「相場罫線術講義」とどちらが先か特定できないが、少なくとも、ローソク足の原形を最初に紹介したのは早坂豊蔵だと考えられる。

岩谷楽泉の「期米観測楽泉秘録」(1913, No.39,*7)では、「(九)日足引」として「此引方は高下の節々の如何に關せず一日中の直段を一直線に描出するものにして而して其寄直と止直及終りの高直を分別し

て記すなり」と書き、さらに「此の日足引の原足を説明したる詳細を知らんと欲せば井上堅白堂編纂の罫線推理法を見るべし」と書いて、井上陽三郎の手法を紹介している。

早坂豊蔵の「最新期米之研究」(1913, No.43,*16)、では、「日足二本に就いての研究の熱心家は、神戸の井上氏であらふ。氏の研究は、寄止足と称し、即ち一日の寄付から大引迄の間の値段を骨髄と見做し、棒足の太き線で書き顯すが寄付及大引から上下に逸出した高低値段は皮肉と見做し、一銭高下あれば一点、二銭高下には・・二点を付し、前日の寄止値段と当日の寄止値段とを比較研究し、翌日の高低を知らんとしたので、其研究の結果は、二百頁余の冊子となって発表せられて居る。」と書き、井上陽三郎の手法を紹介している。岩谷、早坂の2人が

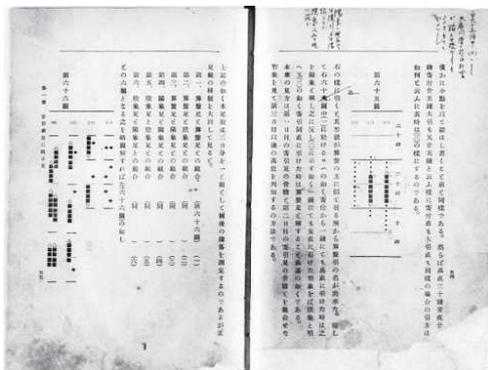


図7. 早坂豊蔵「相場大罫線学」(1914, No.46)

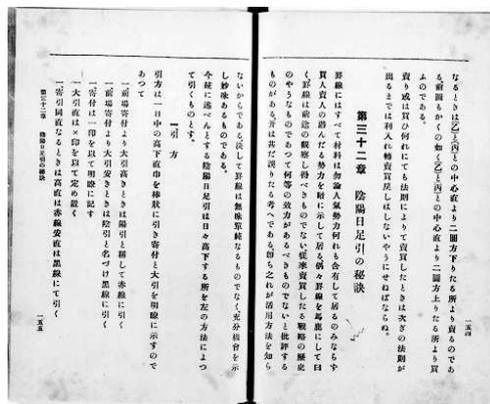


図8. 阿部熹作の「株式金泉秘録」(1917, No.62)

井上を名前入りで紹介しているが、これはあまり類例がない。井上陽三郎が当時の業界で一目置かれる存在だったことがうかがえる。

しかし、その後、早坂豊蔵は「相場大罫線学」(1914, No.46, *17)で「錨形法」を「寄留錨足」に名を変え、描き方も改良した。錨足の寄付の印を「●」から「-」に、大引の印を「()」から「△▽」に変え、さらに実体の部分は「■」の積み重ねに、影の部分を「・」に変えたのである。「■」「・」「△▽」は1個1銭を表す。寄付の「-」は目立たないので、見た目はローソク足に極めて類似したものになった(図7)。

この時までの書物では、棒足や錨足などについて上昇した足を陽象、下落した足を陰象などと呼んで区別したが、陰陽で描く色を変えるという記述はない。従って、陰線も陽線も墨で描かれていたものと推測される。

陽線を赤で描くという記述は、阿部熹作の「株式金泉秘録」(1917, No.62, *1)が最初である。陰陽日足引の引き方として「一、前場寄付より大引高きときは陽引と称して赤線に引く」「一、前場寄付より大引安きときは陰引と名づけ黒線に引く」と書いている。ただし、「寄付は一印を以て明確に記す」「大引直は×印を以て定め置く」とあるので、これは「棒足」の陰陽足である(図8)。

ところで、「寄留錨足」の陰線を墨で、陽線を朱で描くことにすると、寄付と大引の記号がなくても

陰・陽や寄付・大引を識別することができる。そして「寄留錨足」から寄り引けの印を取り除けば、外觀はほとんどローソク足である。

ローソク足は、このようにして成立したのではないか。では、誰が行ったのか。「蠟燭引」を最初に紹介した井上広吉は可能性があるものの、自ら考案したものを自著で紹介しておきながら否定的に評価するとは考えにくい。従って、井上広吉ではあるまい。

一方、ローソク足の原型となった「錨形法」を考案したと推測される早坂豊蔵は、「錨形法」に井上陽三郎の手法を取り入れ、さらに改良して「寄留錨足」と改名して発表するなど、改良と普及に積極的である。従って、早坂豊蔵が「寄留錨足」を陰陽によって黒と赤で描き分けたであろうことは容易に想像される。他に錨足の改良を提唱した人物や書物が見当たらないことも、早坂起源説を補強する。ただ、1914年を最後に早坂の書籍の記録がない。残念ながら断定する証拠は得られなかった。

明治初期から昭和初期にかけての書物を見ると、ローソク足に関する記述は驚くほど少ない。これは即ち、この時代にはローソク足が一般的ではなかったことを示唆している。安田の後、ローソク足の詳細な解説が見られるのは、さらに10年近くを経過して出た、「市場経済講座」というシリーズの第二巻「野線の見方作り方」(1933, No.139, *2)である。執筆者は中外商業新報(現日本経済新聞)の市場部長であった井尻固である。ここでは安田の呼称にな

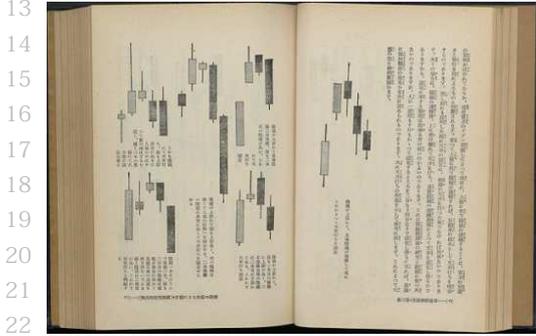
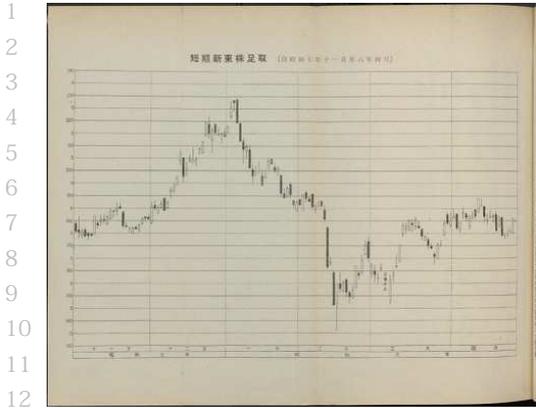


図9. 井尻固 市場経済講座第三巻「罫線による株式相場観測」(1933、No.139)

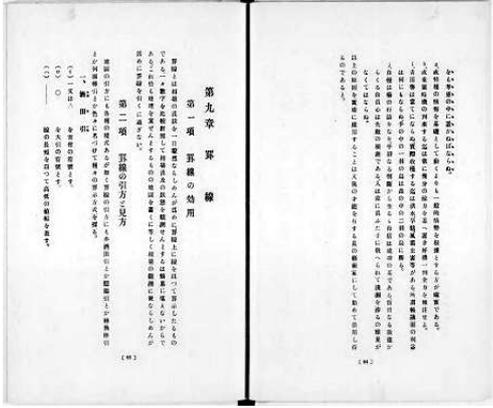


図10. 西司馬次 綿業投機観(1924、No.112)

「切替」の2文字を省略すれば陰陽足であり、寄引の印を付して、日々の騰落が分かるようにした棒足も陰陽足である。

西司馬次は「綿業投機観」(1924、No.112、*14)の中で、酒田引の説明として「(イ)又は>を寄付の符号とす、(ロ)○を大引の符号とす、(ハ)線の長短を以て高低の値幅を表す。」としている(図10)。

これは明らかに棒足の描き方である。著者は、罫線には詳しくなかったと見え、酒田引と棒足を間違えた上、多くの書では寄付を丸印、引を三角印とするのに、これを反対に書いている。

さらに、木村孫八郎は「新聞経済面の読み方・相場篇」(1937、No.133、*9)では、「第三節 罫線観測」の中で、「この他に「陰陽足」又は「陰陽切替足」とよばれるものがある。高値の場合はその値幅を太い朱線で引く、いわゆる「陽線」をもってし、安値の場合は太い黒線、即ち「陰線」を以てする画法である。この陰陽足でその日、その月の足どりをかいたのが、「陰陽引日足」、「陰陽引月足」である。」と書いている(図11)。

「陰陽引日足」とは、安田与四郎がローソク足に対して使った呼び名であり、「陰陽切替足」は本間宗久が使っていたとされるものである。本書では明らかに酒田足とローソク足が同一のものとして扱っている。

「罫線については安達太郎氏の本に懇切な説明が

らって陰陽引日足となっており、蠟燭引は使われていない。説明では陽線は朱で描くことになっているが、図は白抜きまたは灰色となっている。

同シリーズの第三巻「罫線による株式相場観測」(1933、No.139、*3)では、罫線パターンの解釈の仕方を詳述しているが、説明用のチャートにローソク足を用いていることから、彼はローソク足を愛用していたことがうかがえる。そして職業と地位を考えると、井尻がローソク足を普及させる大きな力となった可能性は否定できない。このことは、ローソク足が普及したのは、昭和に入ってからだということを示唆している。ちなみに、同書のチャートの時間軸は、それ以前と異なり左から右へ進んでいる。この頃、左書きに変わったことになる。

その後、いつの頃からか、酒田足とローソク足は同じものと混同されるようになった。混同の原因は、おそらく「陰陽切替足」という名にあるのだろう。

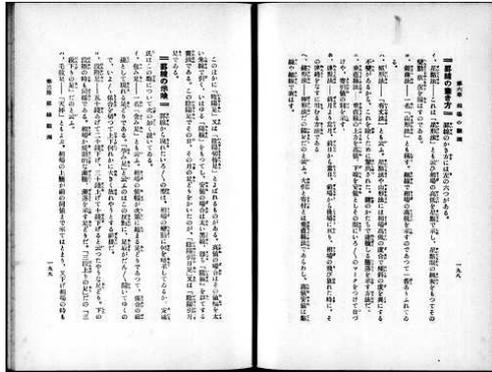


図 11. 木村孫八郎「新聞経済面の読み方相場篇」(1937、No.133)

出ているから、著者は以下同氏に従って罫線のかき方や見方をお話することとしたい。」としているが、「安達太郎が書いた罫線に関する本」が「近代デジタルライブラリー(*10)」では見当たらず、他に同様の間違いを記述している本も見当たらない。従って、現状では本書が酒田足とローソク足を同一視する発端となった可能性が濃厚である。「新聞経済面の読み方」というからには、広く一般大衆向けに書かれた書物であろうから、知識の乏しい大衆へ、間違った情報を一気に広めてしまった可能性がある。

結語

もう 10 年近く前のことだが、筆者は偶然、国立国会図書館のサイトで古書を閲覧できることを知った。そして、古い相場関連書を検索していて「相場罫線術講義」を見つけた。旧漢字と変体仮名に悪戦苦闘しながら何とか読解した結果、ローソク足の起源は本間宗久ではないことが理解できた。その時は知識が 1 つ増えた程度の認識しかなかったが、よく考えてみるとローソク足に限らず日本のチャート分析の発展の歴史は、殆ど分かっていないということに気がついた。

米国では、チャールズ・ダウが相場理論を創案して、それをハミルトンが後継者となってまとめる一方、エリオットは価格変動の分析を深化させて波動

の原理を考案。また、ダウの価格記録法をピリエがビジュアル化して P&F とし、それをコーエンが集大成したといった流れが、比較的明確に整理されているが、日本にはない。「日本罫線史」(*12) が試みてはいるが、十分に成功したとは言いがたい。

理由の 1 つには、米国では 100 年近く前の本が復刻版として安価で手に入るが、日本では古書を手に入れるか閲覧できる図書館を探すかしかなく、リサーチやトレースが難しいことが挙げられる。

その意味で、国立国会図書館の近代デジタルライブラリー(*10) が、インターネットを通じて誰でも自宅で利用できるというメリットは、計り知れないものがある。

本稿では、ローソク足の成立過程およびローソク足と酒田足の関係について明らかにしたが、検索された書物を斜め読みしており全編を精読したものはない。また、ここで取り上げた以外の書物に、もっと重要な証拠が見出されるかもしれない。その意味で、本稿は水面に投げられた一石であり、これをきっかけとして、今後、さらなる研究が進むことを願ってやまない。

<参考文献>

- 1) 阿部熹作 (1917) 『株式金泉秘録』 信義堂書店, pp154-156
- 2) 井尻 固 (1933) 『市場経済講座 第二巻 罫線の見方作り方』 経済知識普及会, pp12-14
- 3) 井尻 固 (1933) 『市場経済講座 第三巻 罫線による株式相場観測』 経済知識普及会, pp6-7, 17-35
- 4) 井上三昧 (広吉) (1920) 『足取の原理』 三昧会, pp50-51
- 5) 井上三昧 (広吉) (1925) 『足取之原理』 三思会, pp44-47
- 6) 井上陽三郎 (1910) 『定期相場高低罫線推理法』 井上堅日堂, pp6-7
- 7) 岩谷楽泉 (1913) 『期米観測楽泉秘録』 岩谷楽泉堂, pp110-111
- 8) 大島城南 (1909) 『期米相場罫線秘法』 弘文堂, pp45-46
- 9) 木村孫八郎 (1937) 『新聞経済面の読み方・相場篇』 栗田書店, pp197-199

- 1 10) 国立国会図書館『近代デジタルライブラリー』 1
 2 <http://kindai.ndl.go.jp/> (2015/10/31 確認) 2
 3 11) 斎藤整軒 (八三郎) (1912) 『期米相場罫線学・ 3
 4 第三版』 一告社, pp9-13 4
 5 12) 住ノ江佐一郎監修 日本テクニカルアナリスト 5
 6 協会編 (1978) 『日本罫線史』 日本経済新聞社, 6
 7 pp87-127 7
 8 13) ダイヤモンド社『石山記念ホール HP・石山賢 8
 9 吉物語』 9
 10 <http://www.dia-ishiyama-hall.jp/memorial/> 10
 11 c04.htm (2015/10/31 確認) 11
 12 14) 西司馬次 (1924) 『業投機観』 蜀通社出版部, 12
 13 pp85-87 13
 14
 15 15) 早坂豊蔵 (二菊) (1904) 『相場罫線術講義』, 1
 16 pp6-9 2
 17 16) 早坂豊蔵 (二菊) (1913) 『最新期米之研究』 3
 18 信義堂書店, pp82-83 4
 19 17) 早坂豊蔵 (1914) 『相場大罫線学』 信義堂書店, 5
 20 pp53-54 6
 21 18) 林 輝太郎 (1991) 『定本酒田罫線法』 同友館, 7
 22 pp2-6 8
 23 19) 無髯老人 (安田与四郎) (1924) 『株式罫線講 9
 24 習録』 ダイヤモンド社, pp89-93 10
 25 20) 猛虎軒 (1885) 『八木虎之巻』, pp8-9 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42

表 1. 日本の近代における相場、罫線関連の邦書 (続く)
 (国立国会図書館近代デジタルライブラリー、インターネット公開分、～1940年)

No	年/月	和暦	タイトル	著者	出版社
1	1881/3	明 14	第二回内国勸業博覧会出品輸出入諸統計及物価表	事務局	—
2	1885/4	明 18	八木虎之巻	猛虎軒	—
3	1885/5	明 18	諸色相庭高下伝	玉江漁隠 編	—
4	1885/5	明 18	八木三猿金泉録	随雲軒登竜述 伴源平編	—
5	1885/5	明 18	八木豹の巻	猛虎軒	—
6	1885/5	明 18	八木童の巻	見幾館主人	—
7	1886/3	明 19	銀米公債高低表	青山孫一郎編	—
8	1890/3	明 23	米商必携相場之針路	市原為之助編	—
9	1890/4	明 23	米相場考	南部助之丞	—
10	1890/5	明 23	米商必携出世の鏡	武藤信吉	尾山堂
11	1891/5	明 24	相場哲学	命哉道人	富貴館
12	1891/8	明 24	毎日相庭高下天眼通	樋口正三郎 編	—
13	1891/11	明 24	米相庭高下論	真勢中州	志方登竜軒
14	1893/11	明 26	一攫千金相場必勝	内山容庵 (神太郎)	此村藜光堂
15	1893/11	明 26	陰陽活物農商必携米価高低六甲伝・商法律解伝	遠藤自疆	南中舎
16	1894/8	明 27	荘内本間宗久翁遺書	早坂豊蔵編	—
17	1894/9	明 27	定期米高低表・明治 17 年	清原鎮蔵 (出版者)	—
18	1895/8	明 28	米相場高低表・天保元年至明治 28 年	清原鎮蔵 (出版者)	—
19	1898/7	明 31	易学八木相庭高下秘訣集	真勢中洲	好文堂
20	1900/10	明 33	期米実験談	青木存武 (独眼) 編	—
21	1901/10	明 34	著者実験定期売買之秘伝	青木伝吉 (水海道人)	—
22	1902/10	明 35	本間家秘蔵宝書	本間宗久著 早坂豊蔵編	—
23	1903/9	明 36	米相場先見足取表活用必勝法	五十嵐栄吉	旭商会
24	1903/11	明 36	応用自在期米必勝新法	山岸弥平	矢鳥誠進堂
25	1904/2	明 37	相場罫線術講義	本間宗久著 葛岡五十香増補 石川善兵衛増補 早坂二菊 (豊蔵) 講義 福田正風執筆	—
26	1908/7	明 41	期米株式相場認識学	早坂二菊 (豊蔵)	信義堂
27	1908/7	明 41	期米哲学	小関金山 (飄風, 喜七)	東北出版協会
28	1909/4	明 42	期米相場罫線秘法	大島城南	弘文堂
29	1909/6	明 42	来月の米株虎の巻・6 月	征矢徳三 編	毎夕新聞社
30	1909/8	明 42	株式期米相場経済学	早坂豊蔵	信義堂
31	1910/4	明 43	宗久翁相場全集	本間宗久著 早坂二菊 (豊蔵) 注	信義堂
32	1910/6	明 43	期米株式相場明鑑	松蔭迂叟	松雲堂
33	1910/10	明 43	株式売買・第 6 版	粉山仁三郎	粉山書店
34	1910/12	明 43	定期相場高低罫線推理法	井上陽三郎	井上堅日堂

表 1. 続き

No	年/月	和暦	タイトル	著者	出版社
35	1911/1	明 44	最新株式之研究	早坂二菊 (豊蔵)	信義堂
36	1911/4	明 44	相場必勝千里眼	機外逸人	尚文館
37	1911/10	明 44	株式期米実用算線学	大楽道人 (鈴木大吉)	太陽館
38	1911/10	明 44	最新株式定期之研究・新東先日日算線表	早坂二菊 (豊蔵)	信義堂
39	1911/10	明 44	最新株式定期之研究・上	早坂二菊 (豊蔵)	信義堂
40	1912/1	明 45	期米相場算線学・第3版	斎藤整軒 (八三郎)	一告社
41	1912/3	明 45	米穀株式相場の研究・第3版	芳翠山人	魁進堂
42	1912/8	大 1	株式売買要訣	井上広吉	三味社
43	1912/11	大 1	米界の光明	北川精一郎 編	—
44	1913/3	大 2	期米観測泉泉秘録	岩谷楽泉 編	岩谷楽泉堂
45	1913/3	大 2	投機靈感論	電光老人 (美島龍夫)	期米原理会
46	1913/5	大 2	風雨豊凶期米高下先見術	吉田一誠	土橋新誠堂
47	1913/6	大 2	期米株式天底測定秘法	三味道人	尚文館
48	1913/7	大 2	最新期米之研究	早坂豊蔵	信義堂書店
49	1914/1	大 3	羽黒式極秘算線学・本場公定用	佐々木英鷹 (羽黒山人)	信義堂
50	1914/1	大 3	株式投資研究	服部直吉	扶桑新聞社
51	1914/11	大 3	相場大算線学	早坂豊蔵	信義堂書店
52	1914/4	大 3	陽堂式小術活法	野口陽堂	尚幾日報社
53	1914/9	大 3	相場必勝法	加藤松太郎 編	急報舎
54	1914/10	大 3	最新応也式期米駈引商戦秘勝術	山口広也	—
55	1915/6	大 4	株式相場物語	丹羽豊	同文館
56	1915/8	大 4	米商秘暦大鑑	柄沢照寛	神誠館
57	1916/3	大 5	株式期米相場の活顧問・上巻	台東隠士	興成社
58	1916/8	大 5	大正時代主要株式騰落図	北橋安太郎 編	北橋算線堂
59	1916/9	大 5	米株算線学の粹	阿部嘉作	信義堂書店
60	1916/10	大 5	羽黒式株式大算線学講義	佐々木羽黒山人 (英鷹)	信義堂書店
61	1916/10	大 5	北浜と兜町	島本得一	文雅堂
62	1916/12	大 5	最新算線株米大勢測定口伝	阿部嘉作	信義堂書店
63	1917/1	大 6	株式算線図・大正5年度	北橋安太郎	北橋算線堂
64	1917/1	大 6	米相場秘訣三法	半白山人 (鈴木藤左衛門)	富泉会出版部
65	1917/2	大 6	株式と米	朝熊泰雅	伊勢屋書房
66	1917/6	大 6	天災季之米	東京毎夕新聞出版部 編	東京毎夕新聞社
67	1917/7	大 6	通俗経済文庫 第一巻~第十二巻	—	日本経済叢書刊行会
68	1917/7	大 6	米株秘録	阿部嘉作	信義堂書店
69	1917/10	大 6	債券利殖法秘伝	債券利殖成金、 覆面相場記者	井上盛進堂
70	1917/11	大 6	株式金泉秘録	阿部嘉作	信義堂書店
71	1917/12	大 6	応用相場必勝法	白翁隠士	同仁社
72	1917/12	大 6	期米高低之真理及売買術	伊藤浜次郎	井商店
73	1918/1	大 7	投機の奥の手	粟根竹斎	中央株式調査会
74	1918/5	大 7	空前の大相場	安田與四郎	理財研究会
75	1918/6	大 7	株式期米相場人気之研究	与那城清信	確信社
76	1918/6	大 7	株式市場	吉原富三郎	初山書店
77	1918/6	大 7	株式實際訓話	株登山人	阿部両替店
78	1918/8	大 7	期米株式相場貨殖大宝典	吉田惣太郎	—
79	1918/8	大 7	相場逆利用法	霊木山人	宝山社
80	1918/9	大 7	株式米系相場要訣	井上三味 (広吉)	東亜堂書房
81	1918/9	大 7	米相場の手ほどきと其の儲ける方法	今井英夫	大阪今延新聞社
82	1918/10	大 7	米相場基本原則	富源社 編	富源社研究部
83	1919/2	大 8	期米活法	安田時直介	音羽商会
84	1919/6	大 8	株式定期講義	赤羽保門 (発行人)	東京経済社
85	1919/6	大 8	綿糸相場観測法	土屋正平	信義堂書店
86	1919/10	大 8	相場するには是だけ知るべし	霊木山人	三土社
87	1919/12	大 8	株式必勝原理と実際	野中春洋	中央経済会
88	1919/12	大 8	投機の秘訣	黒沢熊雄	開玄堂
89	1920/4	大 9	期米相場新算線学	土屋正平	信義堂
90	1920/7	大 9	米相場十二ヶ月全勝秘法	林哲堂	二松堂
91	1920/10	大 9	米価予測論	鴨東学人	中村積徳堂
92	1920/11	大 9	株式の運用：暴騰暴落	野中春洋	九段書房
93	1920/11	大 9	株式相場の変動と投機	丹羽豊	同文館
94	1920/11	大 9	足取の原理	井上三味 (広吉)	三味会
95	1920/11	大 9	霊明行道聖典・第2輯	霊明行道本部 編	心靈哲学会
96	1920/12	大 9	株とは？ こんなもの！	復軒山人	有文館
97	1920/12	大 9	株式現物便覧・大正10年度用	梁池勘平	—
98	1921/6	大 10	株式売買素人早判り	鈴木徳英	碧山閣

表 1. 続き

No	年/月	和暦	タイトル	著者	出版社
99	1921/6	大 10	有価証券放資の新研究	田中巖	経済之實際社
100	1921/8	大 10	妙観：秘訣極意	竹中梧利	中安書房
101	1921/10	大 10	株式定期取引方法と必勝秘訣之研究	岡村吾左衛門	秘訣之研究社
102	1921/11	大 10	株式相場の変動と投機	丹羽豊	同文館
103	1922/5	大 11	よく当る米株相場先見秘法	博運山人	丸木屋書店
104	1922/5	大 11	不況時代の株式投資と向後の株式趨勢	松尾克己	潮文閣
105	1922/6	大 11	一攫千金秘法	京極東絢	栄文堂書店
106	1922/10	大 11	富の鍵	古川二郎	利殖経済研究学会
107	1922/12	大 11	一語千金株式売買の秘鍵	山下太兵衛	貯金文庫
108	1922/12	大 11	最新経済界循環原理	中込誼嵩	中込博愛堂
109	1923/5	大 12	株式相場の観方	無髯老人 (安田与四郎)	理財研究会
110	1923/6	大 12	米株目先中勢相場宝函	阿部薫作	信義堂書店
111	1924/2	大 13	株式野線講習録	無髯老人 (安田与四郎)	ダイヤモンド社
112	1924/5	大 13	綿業投機観	西司馬次	蜀通社出版部
113	1924/6	大 13	株式相場の新しい儲け方	後藤春洋	共益出版社
114	1924/7	大 13	目先の野線	近藤保一	林興生財界研究所
115	1924/8	大 13	三猿虎之巻・大正 13 年版	村田秋江	丸二経済通信部
116	1925/3	大 14	株式期米綿糸生糸相場大観	高木乗	春江堂
117	1925/4	大 14	足取之原理	井上三味 (広吉)	三思会
118	1925/4	大 14	株式相場必勝宝典	木村茂市郎	高島易断所 本部神宮館
119	1925/5	大 14	米相場の見方	松山清吉	英興社出版部
120	1925/8	大 14	期米相場野線学	柴田機一 編	大阪商要新報社
121	1925/8	大 14	野線の見方	井上三味 (広吉)	三思会
122	1925/10	大 14	株式利殖の妙諦	摩耶山人	高天閣
123	1925/10	大 14	米相場必勝法	青木浜三郎	福進堂
124	1925/11	大 14	綿業研究	中川仙洲	綿業研究社
125	1925/12	大 14	株式相場必勝宝典	木村茂一郎	高島易断所
126	1925/12	大 14	通俗株式講話	岸柳莊	雄興社
127	1926/4	大 15	株式期米測定秘法宝泉録	小沢気楽堂主人	宝産社
128	1926/4	大 15	東株新旧日々高低精攪 明治 37 至大正 14	千田理示造	永楽堂書店
129	1926/5	大 15	極法	大興社通信部 編	大興社
130	1926/9	大 15	紡績業と綿糸相場	深沢甲子男	同文館
131	1926/12	大 15	米	池田落花	新潟時事新聞社
132	1927/12	昭 2	株式相場の仕方と見方	勝田貞次	大同書院
133	1928/11	昭 3	通俗近代経済叢書・第 8 編	立花貞雄	清水書店
134	1929/11	昭 4	最新経済界循環原理・第 3 版	中込誼嵩	永楽堂
135	1930/8	昭 5	景気予測論	和田種生	大同書院
136	1932/1	昭 7	株式必勝戦術	株式調査会 編	平和堂経済部
137	1933/9	昭 8	株式投資年鑑・昭和 8 年版	経済情報社 編	経済情報社
138	1933/10	昭 8	株価測定の常識	田林菊三郎商店 考査部 編	田林菊三郎商店
139	1933/10	昭 8	市場経済講座 第一巻～第六巻	—	経済知識普及会
140	1933/11	昭 8	投資のコツ	勝田貞次	宝文館
141	1935/3	昭 10	株式投資要覧	新田宗盛 編	帝国時事通信社
142	1936/4	昭 11	野線上に於ける型の法	北岡宮吉	庚申会
143	1937/5	昭 12	新聞経済面の読み方・相場篇	木村孫八郎	栗田書店
144	1939/8	昭 14	株式相場構成原理の新観測法	馬場一	春潮社
145	1940/12	昭 15	株式便覧 第 38 次 (昭和 16 年)	東京株式取引所 取引員組合 編	—